

Peculiar Sounds (Natsume Sōseki)

へん おと
変な音

じょう
上

うとうとしたと思^{おも}ううちに眼^めが覚^さめた。すると、隣^{となり}の室^{へや}で妙^{みょう}な音^{おと}がする。始め^{はじめ}は何^{なん}の音^ねともまたどこから来^くるとも判^は然^っした見^{けん}当^{とう}がつか^きなかつたが、聞^きいているうちに、だんだん^{だんだん}耳^{みみ}の中^{なか}へ纏^{まと}まった観^{かん}念^{ねん}ができてきた。何^{なん}でも山^{やま}葵^{あおい}おろしで大^{だい}根^{こん}かなにかを^なごそ^ごそ擦^すっているにち^ちが^{がい}違^{ちが}い。自分^{じぶん}は確^{たしか}にそうだと思^{おも}った。それ^{それ}にしても今^{いま}頃^{ごろ}何^{なに}の必要^{ひつよう}があつて、隣^{となり}の室^{むろ}で大^{だい}根^{こん}おろしを^{こしら}拵^{そうぞう}えているの^のだか想^{そう}像^{ぞう}がつか^{つか}ない。

いい忘^{わす}れたがこ^こは病^{びょう}院^{いん}である。賄^{まかない}は遥^{はる}か半^{はん}町^{ちょう}も離^{はな}れた二^に階^{かい}下^げの台^{だい}所^{じょ}に行^いかなければひとり^{ひとり}もい^いない。病^{びょう}室^{しつ}では炊^{すい}事^じ割^が烹^{ぼう}は無^む論^{ろん}菓^か子^しさえ禁^{きん}じら^られている。ま^まして時^{とき}ならぬ今^{いま}時^じ分^{ぶん}何^{なに}しに大^{だい}根^{こん}おろしを^{べつ}拵^{ぞう}えよう。これ^{これ}はき^きつと別^{べつ}の音^ねが大^{だい}根^{こん}おろし^のよう^のに自^{きこ}分^こに聞^きえるの^のにきま^まっていると、すぐ^{すぐ}心^{こころ}の裡^{うち}で覚^さつたよ^ような^なもの^{もの}、さ^さてそれ^{それ}ならはた^たしてど^どこから^{から}どうして出^でる^るのだらうと考^{かんが}え^えるとや^やっぱり^り分^{わか}ら^らない。

自^じ分^{ぶん}は分^わら^らない^いなり^にして、も^もう少^{すこ}し^し意^い味^みの^{こと}あ^ある^る事^{こと}に自^あ分^{たま}の^{つか}頭^{こころ}を^を使^{つか}おう^とと試^{こころ}み^をた。け^けれ^れど^ども一^{いち}度^ど耳^{みみ}につ^ついた^たこ^この^ふ不^ふ可^か思^し議^ぎな^な音^ねは、^{つづ}それ^{それ}が^{つづ}続^{つづ}いて^{つづ}自^こ分^まの^う鼓^う膜^つに^か訴^かえ^える^る限^{かぎ}り、^{しん}妙^{しん}に^{けい}神^{しん}經^{けい}に^{けい}崇^{しん}つて、^{しず}ど^どう^どし^しても^も忘^われ^れる^る訳^{わけ}に行^いかな^なかつ^つた。あ^あた^あり^りは^{しん}森^{しん}と^{しず}して^{しず}静^{しず}か^かで^であ^ある^る。こ^この^{むね}棟^{むね}に^{はなし}不^ふ自^じ由^ゆな^な身^みを^を託^{たく}した^た患^{わづ}者^{むね}は^{はなし}申^まし^し合^あせ^せた^たよ^よう^うに^に黙^{だま}つて^{だま}い^いる^る。寝^ねて^てい^いる^るの^のか、^{はなし}考^{かんが}え^えて^てい^いる^るの^のか^か話^{はなし}を^をする^るもの^{もの}は^{はなし}一^{いち}人^{にん}も^もな^ない。廊^{ろう}下^かを^を歩^{ある}く^く看^{かん}護^ご婦^ふの^う上^う草^わ履^{ぞうり}の^の音^ねさ^さえ^え聞^きえ^えない。そ^その^その^そ中^{ちゆう}に^にこ^この^ごご^ごし^しと^と物^{もの}を^を擦^すり^り減^へらす^すよ^よう^うな^な異^いな^な響^{ひびき}だ^だけ^けが^が気^きにな^なつ^つた。

自^じ分^{ぶん}の^{へや}室^{むろ}は^もと^と特^{とく}等^{とう}と^として^{して}二^ふ間^たつ^つづ^づき^きに^{つく}作^{つく}ら^られた^たの^のを^を病^{びょう}院^{いん}の^{つごう}都^{つごう}合^{ひと}で^で一^わつ^つず^ずつ^つに^に分^わけ^けた^たもの^{もの}だ^だから、^{ひばち}火^ひ鉢^{ばち}な^など^どの^お置^おいて^{いて}あ^ある^る副^ふ室^{しつ}の^{ほう}方^{ほう}は、^{ふつう}普^{ふつう}通^{つう}の^{かべ}壁^{かべ}が^{となり}隣^{となり}の^{さかい}境^{さかい}に^なな^なつ^つて^てい^いる^るが、^{ねどこ}寝^ね床^{どこ}の^し敷^しい^いて^てあ^ある^る六^{ろく}畳^{じょう}の^{ひがしがわ}方^{ほう}にな^なると、^{ろくしゃく}東^{ろく}側^{しゃく}に^{ふくろとだな}六^{ふくろと}尺^との^{わき}袋^{わき}戸^{ばし}棚^{しょうふ}が^{ふすま}あ^あつ^つて、^{わき}そ^ばの^{ふすま}傍^{ふすま}が^{ふすま}芭^ば蕉^{しょう}布^ふの^{ふすま}襖^{ふすま}で^{ふすま}す^すぐ^ぐ隣^{りん}へ^{しつ}往^{しつ}来^なが^なで^でき^きる^るよ^よう^うにな^なつ^つて^てい^いる^る。こ^この^{いちまい}一^{いち}枚^{まい}の^{しきり}仕^し切^{きり}を^あが^あら^らり^りと^あ開^あけ^けさ^さえ^えす^すれば、^{りんしつ}隣^{りん}室^{しつ}で^な何^{なに}を^をし^して^てい^いる^るか^かは^{わか}た^たやす^すく^く分^わる^るけ^けれ^れど^ども、^{たにん}他^た人^{にん}に^{たい}対^{たい}して^{して}そ^それ^れほ^ほど^どの^{ぶれい}無^{ぶれい}礼^{れい}を^をあ^あえ^えて^てす^する^るほ^ほど^ど大^{だい}事^じな^な

おと むろん おり あつ むか じせつ えんがわ つね あ はな
音でないのは無論である。折から暑さに向う時節であったから縁側は常に明け放したままで
あった。縁側はもと むね ほそなが つづ かんじゃ えんばた で たがい みとお
す不都合を避けるため、わざと二部屋毎に開き戸を設けて御互の関とした。それは板の上へ
ほそ さん じゅうもんじ わた しゃれ こづかい まいあさふきそうじ した かぎ も
細い棧を十文字に渡した洒落たもので、小使が毎朝拭掃除をするときには、下から鍵を持
って来て、いちいち とをあ ゆ れい た しまい うえ た
って来て、一々この戸を開けて行くのが例になっていた。自分は立って敷居の上に立った。か
の音はこの妻戸の 後 から出るようである。戸の下は二寸ほど空いていたがそこには何も見えな
かった。

おと ご くりかえ とき ごろつぶんつづ じぶん ちょうしんけい しげき こと
この音はその後もよく繰返された。ある時は五六分続いて自分の聴神経を刺激する事もあ
ったし、またある時はその 半 にも至らないでぱたりとやんでしまう折もあった。けれどもそ
の何であるかは、ついに知る機会なく過ぎた。病人は静かな男であったが、折々夜半に
かんごふ ちい こえ おこ しゅしょう おんな いちど にどよ
看護婦を小さい声で起していた。看護婦がまた殊勝な女で小さい声で一度か二度呼ばれる
と快よい優しい「はい」と云う受け答えをして、すぐ起きた。そうして患者のために何かし
ている様子であった。

ひかいしん ばん となり まわ て ま おも
ある日回診の番が隣へ廻ってきたとき、いつもよりはだいぶ手間がかかると思っていると、
やがて低い話し声が聞え出した。それが二三人で持ち合っとなかなか捗取らないような湿り
け お いしゃ きゅう おなお
気を帯びていた。やがて医者の方で、どうせ、そう急には御癒りにはなりませんからと云っ
た言葉だけが判然聞えた。それから二三日して、かの患者の室にこそそこそ出入りする人の気色
がしたが、いずれも己れの活動する立居を病人に遠慮するように、ひそやかにふるまってい
たと思ったら、病人自身も影のごとくいつの間にかどこかへ行ってしまった。そうしてその後
へはすぐ翌る日から新しい患者が入って、入口の柱に白く名前を書いた黒塗の札が懸易
えられた。例のごしごし云う妙な音はとうとう見極められる事ができないうちに病人は退院し
てしまったのである。そのうち自分も退院した。そうして、かの音に対する好奇の念はそれぎ
り消えてしまった。

げ
下

さん げつ じぶん おな びょういん はい へや まえ ばんごう ひと ちが
三カ月ばかりして自分はまた同じ病院に入った。室は前のと番号が一つ違うだけで、つま
りその西隣であった。壁一重隔てた昔の住居には誰がいるのだろうと思って注意して見る

と、終日かたりと云う音もしない。空いていたのである。もう一つ先がすなわち例の異様の音の出た所であるが、ここには今誰がいるのだから分らなかった。自分はその後受けた身体の変化のあまり劇しいのと、その劇しさが頭に映って、この間からの過去の影に与えられた動揺が、絶えず現在に向って波紋を伝えるのとで、山葵おろしの事などはとんと思い出す暇もなかった。それよりはむしろ自分に近い運命を持った在院の患者の経過の方が気にかかった。看護婦に一等の病人は何人いるのかと聞くと、三人だけだと答えた。重いのかと聞くと重そうですと云う。それから一日二日して自分はその三人の病症を看護婦から確めた。一人は食道癌であった。一人は胃癌であった、残る一人は胃潰瘍であった。みんな長くは持たない人ばかりだそうですと看護婦は彼らの運命を一纏めに予言した。

自分は縁側に置いたベゴニアの小さな花を見暮らした。実は菊を買うはずのところを、植木屋が十六貫だと云うので、五貫に負けると値切っても相談にならなかったのか、帰りに、じゃ六貫やるから負けろと云ってもやっぱり負けなかった、今年は水で菊が高いのだと説明した、ベゴニアを持って来た人の話を思い出して、賑やかな通りの縁日の夜景を頭の中を描きなどして見た。

やがて食道癌の男が退院した。胃癌の人は死ぬのは諦めさえすれば何でもないと云って美しく死んだ。潰瘍の人はだんだん悪くなった。夜半に眼を覚すと、時々東のはずれで、付添のものが氷を掻く音がした。その音がやむと同時に病人は死んだ。自分は日記に書き込んだ。――「三人のうち二人死んで自分だけ残ったから、死んだ人に対して残っているのが気の毒のような気がする。あの病人は嘔気があって、向うの端からこっちの果まで響くような声を出して始終げえげえ吐いていたが、この二三日それがぴたりと聞えなくなったので、だいぶ落ちついてまあ結構だと思ったら、実は疲労の極声を出す元気を失ったのだと知れた。」

その後患者は入れ代り立ち代り出たり入ったりした。自分の病気は日を積むにしたがってしだいに快方に向った。しまいには上草履を穿いて広い廊下をあちこち散歩し始めた。その時ふとした事から、偶然ある付添の看護婦と口を利くようになった。暖かい日の午過ぎ食後の運動がてら水仙の水を易えてやろうと思って洗面所へ出て、水道の栓を振っていると、そ

の看護婦が受持の室の茶器を洗いに来て、例の通り挨拶をしながら、しばらく自分の手にした朱泥の鉢と、その中に盛り上げられたように膨れて見える珠根を眺めていたが、やがてその眼を自分の横顔に移して、この前御入院の時よりもずっと御顔色が好くなりましたねと、三カ月前の自分と今の自分を比較したような批評をした。

「この前って、あの時分君もやはり附添でここに来ていたのかい」

「ええつい御隣でした。しばらく〇〇さんの所におりましたが御存じはなかったかも知れません」

〇〇さんと云うと例の変な音をさせた方の東隣である。自分は看護婦を見て、これがあの時夜半に呼ばれると、「はい」という優しい返事をして起き上がった女かと思うと、少し驚かずにはいられなかった。けれども、その頃自分の神経をあのくらい刺激した音の原因については別に聞く気も起らなかった。で、ああそうかと云ったなり朱泥の鉢を拭いていた。すると女が突然少し改まった調子でこんな事を云った。

「あの頃あなたの御室で時々変な音が致しましたが……」

自分は不意に逆襲を受けた人のように、看護婦を見た。看護婦は続けて云った。

「毎朝六時頃になるときっとするように思いましたが」

「うん、あれか」と自分は思い出したようについ大きな声を出した。「あれはね、自働革砥の音だ。毎朝髭を剃るんでね、安全髪剃を革砥へかけて磨ぐのだよ。今でもやってる。嘘だと思ふなら来て御覧」

看護婦はただへええと云った。だんだん聞いて見ると、〇〇さんと云う患者は、ひどくその革砥の音を気にして、あれは何の音だ何の音だと看護婦に質問したのだそうである。看護婦がどうも分らないと答えると、隣の方はだいぶん快いので朝起きるすぐと、運動をする、その器械の音なんじゃないか羨ましいなと何遍も繰り返したと云う話である。

「そりゃ好いが御前の方の音は何だい」

「御前の方の音って？」

「そらよく大根だいこんをおろすような妙みょうな音がしたじゃないか」

「ええあれですか。あれは胡瓜きゅうりを擦すったんです。患者かんじゃさんが足あしが熱ほてって仕方しかたがない、胡瓜の汁つゆで冷ひやしてくれとおっしゃるもんですから私わたしが始終しじゅう擦あって上げました」

「じゃやっぱり大根おろしの音なんだね」

「ええ」

「そうかそれでようやく分わかった。——いったい〇〇さんの病びょうき気は何だい」

「直腸癌ちよくちようがんです」

「じゃとてもむずかしいんだね」

「ええもうとうに。ここを退院たいいんなさると直じきでした、御亡おなくなりになったのは」

自分じぶんは黙然もくねんとしてわが室へやに帰かえった。そして胡瓜きゅうりの音ねで他人ひとを焦じらして死しんだ男おとこと、革砥かわどの音ねを羨うらやましながら快よくなった人ひととの相違そういを心こころの中なかで思おもい比くらべた。